

ホッブズ 国家論における 宗教観 研究：

リヴァイアサンを 中心として

統一思想研究院、 黄哲夏 (Ph. D)

I. はじめに

ホッブズ（1）が『リヴァイアサン』で見せている彼の学問的態度は、厳正な論理的分析と推理を武器として、政治的混乱と闘争の連続という現実政治の荒波の中で、政治論争に直接介入せずとも数々の政治的問題を解決しうる解決法を提示しようという、強い意図を見せているという点である。しかしホッブズは彼自身の努力と希望にもかかわらず、当時の英国の数々の政治的勢力、すなわち神聖君主論を主張した絶対主義者等や、市民権に立脚した共和制首唱者どちら側からも認められなかった。（2）

ホッブズが生きたヨーロッパの西欧社会は、当時の国家的状況に従って少し異なるが、一般的に16～18世紀にかけて絶対主義が広まった絶対君主主義時代であった。従って国王は強力な中央集権的な統一国家を形成して、都市や地方の自治的特権層である封建諸侯たちを撃破していくことができた。同時に中世後期に作られた身分制議会さえも王権の前に無力に屈服した時代であり、中央集権的な統一国家を歓迎する市民階級の強力な協調の下で君主は絶対的な権力を持つようになった。これについての代表的な論理が王権神授説である。

このような状況の中から現実的に強力になった絶対君主制という思想は権威主義にならざるをえなかった。これはフランス学者ボーデン(Bodin)が国王を家父長に比喻して、王権の絶対性を擁護したり、ホッブズが人間の自然状態を‘万人に対する万人の闘争状態’とみながら、これを終息させるために人々に契約を結ばせ、主権者すなわち君主にあらゆる権力を任せなければならない（3）と主張した事実は、端的にその時代の現実を擁護するようになった歴史的状況であると言えることができる。

従ってホッブズが抱いた思想的源泉は、強力な主権者すなわち君主を中心とした政府であり、能率至上主義的な内容が思想の軸をなしている。この根拠として1640年に発表した『法学原理』や1651年に発表した『リヴァイアサン』は、みな一様に彼がその胸中に描いた強力な統治権に対する見解を表した思想としてほとんど似かよった表現を用いている。このような彼の基本的な哲学的視覚は、事実上国家目的、すなわち平和と安全を図るために強力な公権力や統治権を使用するべきであるという論理を強調するのに至ったとみることができる。リヴァイアサンに表れた国家論を基礎にして彼の宗教観を調べてみようと思う。

II. ホッブズ哲学の論理的基礎

ホッブズは1630年クリントン卿家からカボンディシ家に移った後、フランスとイタリアに彼の3回目の大陸旅行をする。この時イタリアを旅行したうち、ピサでガリレイ(G. Galilei、1564～1642)に会って物体と運動に関する近代物理学を知るようになり、フランスのパリに留まる間にフランシスコ修道士であるマリン・メルセンヌ(Marin Mersenne、1588～1647)に会

い親しい間柄をもつようになったが、そこでデカルト(R. Descartes、1596～1650) 及びピエール・ガセンディ(Pierre Gassendi、1592～1655) など(4) の数々の著名な科学者、哲学者に会い意見を交換できるようになった。このような一連の過程により、彼は新学問すなわち幾何学と物理学に接するようになり、また幾何学の演繹的方法論と物理学の運動の原理(慣性の法則)に従って、自然と人間と社会ないし国家を説明しうる理論的基礎をもつようになった。

これは彼の哲学における一大転換であった。(5)

ホッブズはこのような方法論を政治哲学に適用して、自然物体としての個別的な人間と人工物体としての国家共同体間の関係を運動の原理と分解-合成の方式に従って、生理学的、心理学的に分析することによって理論の体系化を試みた。別の言い方をすれば、a)社会をその構成部品である個人人間の運動に分解して、b)その次には、個人人間の運動を想像的または仮定的な単純な力に分解して、c)感じて得られた単純な力、すなわち誰でもみな認めて合意しうる普遍的で自明な単純命題を演繹的に合成して、個人人間と政治社会という複合命題の運動原理を樹立しようとしたのである。(6)

ホッブズが複合命題である国家共同体の性格を糾明するにおいて、人間を自明な単純命題に分解して、そこに運動の原理を適用して抽出して出したものが、まさに彼の人性論である。全体(国家共同体)に対する部分としての人間は、これ以上分解出来ない段階にまで分解して普遍的な本性を知る。そしてそういう本性が、外力の作用がない限りどんな状態にまで動くように(運動するように)なるかを分析した後、合成方法に従って理想的な解決策として国家共同体の再構成の方法を明らかにする。要するに、物体一般についての研究から出発して、人間についての分析、そしてその分析を通して人工物体である国家を扱う一つの体系的な理論を出したのである。

III. ホッブズの国家論の基礎としての人間観

ホッブズは『リヴァイヤサン』‘序説’で、国家の素材(matter)になる人と、国家を創造する人としての人間について言及している。彼は人体のいろいろな器官を国家の主要組織と対比して説明しながら、自然は神が世界を創造し統括する芸術品であるように、人間も神の創造を模倣して自然を人工動物(artificial animal)で造ってみることができるであろうと言った。(7) すなわち神がその形状に似せて人間を造ったように、人間はその形状に似せて国家を造っていくことができるものとみたのである。従って、彼は何よりもまず人間の本性を糾明しようとし、ここで糾明される数々の定理を通じて国家に関する彼の哲学的見解を導き出そうとした。

1. 情念的存在としての人間

ホッブズが理解しようとした人間についての定義は、人間情念の分析から始まる。ホッブズの言う情念とは何か?人間は一生を通して生命的運動と動物的运动をしながら生きていくのである。生命的運動とは出生と同時に始まる運動で、血液の循環、脈拍の拍動、呼吸、消化、栄養、排泄などを進行させる運動をいう。このような運動は、想像力の助けを全く必要

としないという特徴をもつ。ところが動物的运动とは、人間が心の底から想像したとおりに歩き、話し、心に決めたとおりに四肢を動かすことを言う。(8)このような動物的运动をホッブズは意志的运动といったが、このような意志的运动は、常にこれに先行する‘どこで’‘どうやって’‘何を’という思考を伴って原因となる想像力が、あらゆる意志的运动の内的动機になることは明白である。ホッブズは人間をしてこのような意志的运动をさせる内的动機を情念(passions)と定義したのである。

また人間が所有した欲望は無限であるために、その欲望は充足され得ない心理的な面が絶えず作用している。すなわち自身の欲求充足のための意志力的作用は無限に持続するとみたのである。従って人間の意志を実現させてくれる欲望は無限であるために、人間の欲求を決して充足させてくれえない立場である。これと同様に“万人に対する万人の闘争”状態の中では、力の論理が支配するために、人間はどんな喜びにも容易に満足できず互いに戦うようになる。このように人間が争う原因について、ホッブズが言うに“競争(competition)、自信が無いこと(diffidence)、名誉(glory)”(9)のためであると指摘する。競争は人間が自身の利益のために相手方を攻撃することであり、自信が無いことと名誉は、各々自らの安全と自身の体面維持のために相手方を攻撃するものである。

2. 平等な存在としての人間

ホッブズは人間が平等であると主張する。すなわち人間は生まれてこのかた平等である立場である。ホッブズは人間が平等であるという事実について次のように話す。

“自然は人間を身体と精神能力において平等に創造した。…身体の強さでみるならば最も弱い人であっても、陰謀や自身と同じ危険に陥っている他人等と共謀することによって、最も強い者を殺すのに十分な力をもっているためである。”(10)

“あらゆる人は平等である。”というこの言葉は近代西洋政治思想の根本である。ところが人間は平等な存在というこの言葉について、私たちはどれくらい同意できるのか？プラトンは人間が平等であるという事実を否認した。人間は出生の時からもって生まれた能力、性格そしてもって生まれた数々の条件が異なる。不平等であるのが現実の実状である。ところがホッブズは躊躇せず“誰がより良い人かという問題は、単純な自然の状態では存在しない。この場合にはあらゆる人が平等である。”(11)とすることで人間が平等であることを強調する。

3. 自然状態の下での人間 -疲労した人間-

ホッブズが唱えた自然状態(state of nature)は、彼が独特に使用した概念として、彼の政治哲学の大前提を構成する概念の中の一つである。ホッブズはこの概念を使用することによって、‘自己保存’を存在の目的とする人間の自然的条件を最も含蓄をもって表現しており、同時に後にもう一度検証する、自然法の必要性をはっきりと誘導するための一つの前提条件として使用している。だがどこにおいても、彼は‘自然状態’という概念を明快に定義してはいない。すなわち‘自然状態’という概念は彼のいろいろな著書で使用しているが、その

概念を叙述的に描写するところで終わっている。(12) 従って自然状態という概念は虚構ではないかとか、論理的仮定として理解しなければならないとかいう見解がある。彼は人間が自身の存在を保存するためには、ただ自分自身の力によってのみ生き残ることができるという、‘ジャングルと同様な’力の無政府状態としての‘自然状態(state of nature)’を想定し、人間の状況を論理的に描写していく。

ところが自然状態で‘万人に対する万人の闘争’が発生する理由はどこにあるか。ある者は聖書の創世記1章の内容を根拠に、失樂園の比喻から探している。(13) 樂園に居住したアダムとイブが取って食べるなという禁断の実である善悪果を取って食べ、墮落することによってその場所で追放されたためというのである。すなわち神様の命令に絶対服従しなければならない人間が墮落することによって失樂園したのであり、その間保護膜の役割をしていた自然は、荒く馴染まない他者に変ったということである。筆者もこの見解に対して一部同意する。だが『原理講論』(14)によれば、全知全能な神が人間の墮落行為に干渉出来なかった事情に関する説明が付加される必要があるようである。(15)

ホッブズは人間を規定するにおいて、人間が貪欲的であって、利己的な属性をもった存在と言いつつも、他の一方では、自然状態という人間が処した疲労した状況から平和を指向させる情念もまたもっている存在であると言う。このように貪欲的ながらも、利己的な心と情念が人間の内面をなしているところにおいても、ホッブズは人間本性を総合的に説明できずその程度に断片的に説明しているだけである。(16)

IV. ホッブズの国家論

ホッブズは人間関係を戦争状態から平和状態に転換させるために、自然権を相互に譲渡する契約を締結しなければならないと主張する。ところが契約(17)はあくまでも各個人の善のためであり、その善という身の安全と社会の中における自身の地位と幸福追求のためとなるように、各個人は契約以後にも相変わらず自分らの自己保存を追求する権利をもつ。一つの政治共同体で生きていく人々が、自らを拘束するために導入するようになる窮極的な原因・目的あるいは構想は、自分らの保存とより満足な生(18)にあるためである。

個別人間が自然権を相互に譲渡することによって契約として成立するのは、他でもない主権である。主権は自然権の内容である合理的な人間関係を基準として、これを破る場合、報復することができる処罰権を独占する。従って主権が成立することによって、各個人は合理的な人間関係の基準を守る範囲内で、自身の社会的自己保存のために個人的合理性を発揮できるようになる。このような意味で主権は憲法とも同じようなものであり、社会の基本構造の役割をする。

しかし契約だけで自然状態が終息するのではない。各個人は相互に譲渡された自然権を、第11から第19自然法に明示された主権行使の公平性に符合するように、主権を主権者に委託する新しい約束を結ぶ。しかしホッブズによれば契約は公平性だけでは守られない。ホッブズは契約の内容である合理的な人間関係の基準に対する遵守は、それを破ることによって受けるようになる処罰に対する‘恐怖’がある時はじめて可能になるとみた。それで彼は“刀のない契約は言葉に過ぎず、人間を保護する力が全くないのである”(19)と言った。

国家の設立目的を説明するに先立ち、ホッブズは国家をどのように定義したか。彼は国家を次のように定義する。

“国家とは、万人が彼ら相互間の契約を通して権能が付与された一つの人格である。そしてその人格は、万人の力と手段を合目的に平和と共同体の防衛のために使用することを目的とする。” (20)

すなわちホッブズが定義した国家とは個別人間の人格が統一された多数であり、平和を実現するために万人の相互契約により創造された単一人格をいう。ホッブズは国家の存在目的が平和実現にあることを強調したのである。また国家を設立する目的は、個人の安全を図るためであった。すなわちそれは人間を外敵の侵入から防衛することであり、各個人相互間の闘争による障害を防止することであり、個人の安楽な生活を通して共同の平和を実現するところにある (21)。

ホッブズは人間には自身に対する拘束を許容し、その結果として自身の保全とより満足な生を獲得することによって、人間の自然的情念によってもたらされる非人間的な自然状態から抜け出すだけでなく、苦痛の極限から解放させてくれる、そのような国家が必要であると考えに至る。ホッブズは“それはあたかも万人が万人に‘私はあなた方が彼にあなたの権利を放棄して、彼と共に彼のあらゆる行動を承認するという条件の下に、自分自身を支配する自身の権利をこの人またこの集団の人々に放棄し承認する’ と語ることと同じである” (22) のである。

このように国家の本質についての彼の見解は、個別の人間たちの相互的契約行為を通して、自然権を譲渡して自分らの平和実現と共同の防御のために作った一つの人格 (one person) があると分析しながら、このような人格を具現するものを国家とみた。ホッブズは個別人間の生命を保障して安全を維持するためには、万人相互間の新しい約束により、君と私でない第3の共同的な力の設置が必要であるとみて、そのどれよりも強大な力をもった国家としてリヴァイアサンを想定したのである。

リヴァイアサン (Leviathan) は“(より敬虔に言えば) 私たちが不滅の神 (immortal God) の加護の下、私たちの平和と保護を依託している、あの必死の神 (mortal god)” (23) である。元来‘リヴァイアサン’という言葉は“旧約聖書”の‘ヨブ記’に出てくる海の怪物として、神を除いては誰もこの世で彼を押さえることができない強大な力をもった存在 (24) として描写されている。ホッブズが国家をこのようなリヴァイアサンに比喻したことは、そのような強力な力をもった国家だけが、自然状態で人間が見せる利己心と不信感と権力欲を抑制することによって、平和を維持して個別人間の安全を保障する道を提示できるだろうと感じたからである。

1. 国家設立の形態

ホッブズは国家の代表者である主権構成者の数を基準として国体を分類した。(25) すなわち権力構成者が1人である場合その国家は君主制 (monarchy) であり、その構成者が2人以上である場合において臣民の一部が合議体を構成する場合には貴族制 (aristocracy) とし、臣民

全体が合議体をつくる場合には民主制 (democracy、popular commonwealth) という。このような分類はアリストテレスにその始原を探ることができる。(26)

ホッブズはそのほかに政治体制として暴君制 (tyranny)、寡頭制 (oligarchy)、無政府制 (anarchy) などを掲げ、彼はこれを‘憎悪を受けた同一な形態の名称’とって認定しなかった。すなわち彼は、君主制下で不満をもった人々はそれを暴君制と呼び、貴族制下で不満をもった人はそれを寡頭制と呼び、民主制下でそれに不満をもった人々は統治欠乏の無政府状態と呼ぶ。無政府状態とは事実上政府が存在しない状態であるから、これは国家と呼ばれ得ないのである。(27)

ホッブズは君主国でも民主国でもその形態とは関係なく、平和実現と臣民の安全が保障されるという、そういう国家の統治目的が達成されるならば、それらのどの政府形態も正当化されうるという立場である。これはあたかも鄧小平が南巡講話 (1992) を始めながら、中国現代化の論理的基礎として提示した‘黒猫白猫’理論を連想させる部分でもある。ホッブズは主権が必ず 1 人の手中に所在しなければならないとは主張しなかったが、それにも拘わらず彼は最も望ましい国家形態として君主制を好みつつ、それに対する理由を次のように提示する。(28)

最初に、君主国では私益と公益が一致する。君主の富・力・名誉は、ただその臣民らの富・力・名誉から出てくる。臣民らが貧しかったり卑劣であったり、敵意の欠乏により敵との戦争を遂行できないならば、彼らの国王は富裕であったり栄光を仰いだり安全ではありえないからである。

二つ目に、君主は自由に諮問を求めて、地位の上下に関係なく秘密裏に彼が深思熟考する問題に対して精通した人々の意見を聞くことができる。

三つ目に、意思決定が君主 1 人に依拠することでなかなか動揺せず、数による内紛が起きない。一方、主権の合議体では、数からの不安定性が起きて一度下りた決定も容易に廃棄される危険性をもっている。

四つ目に、君主制は単独制であるから合議体のように紛争が起きない。一方、合議体は意思対立によって内乱を招きうる。

五つ目に、君主国においては、主権が乳児や善悪を区別出来ない人に世襲もされうる。そしてその権力は、実際には他の人によって行使される不便があるが、それと類似の不便は他のあらゆる政体でも発見されうるという点である。

このようにホッブズは合議体に帰属している民主国と比較しながら君主国を擁護したが、その理由は君主政治こそは他のどんな政体よりも平和維持と平和実現を通じた安全の保障という、国家目的を効率的に達成でき、国家的統一性を維持できると判断したからである。このような見解を主張した人はホッブズだけでなかった。

‘ホッブズ国家論の宗教的性格’で再び論議するが、彼は聖書に記録された内容のとおり平和世界の実現のために、その方 (再臨のイエスあるいは再臨主: 筆者) は君主のような王の中の王として再び来る (29) とみている。すなわち再来するその方を形象化したのが、1651年に初めて発行された彼の著書『リヴァイアサン』初版中表紙に載せられた絵 (論文の一番終わり) である。君主国の擁護を好んだホッブズは、聖書が予言したとおり王の中の王としてそ

の方が来られて平和の世界を実現するはずで、またその絵が見せているように対立と葛藤、戦争と闘争の世界を克服して、平和の理想世界を実現するはずであるとの、彼の意図を象徴的に表現している。

2. 主権者の権利と義務

主権とは、一国家としてもつ独立の自主権、すなわち国家を統治する統治権を意味するが、これは国家において最高・絶対・不可分の属性をもっているイデオロギー的概念である。ホッブズは主権者がもつ権利の内容について次のとおり列挙する。(30)

最初に、臣民(国民)は国家の政体を変更させることができないことである。二つ目に、主権は略奪され得ないことである。三つ目に、誰も多数により宣布された主権者の擁立に反抗出来ないという点である。四つ目に、主権者の行為を臣民らが正当に批判できないという点である。すなわち臣民は主権者のあらゆる行動と判断の創造者であるがゆえに、制度的に委任を受けた彼のあらゆる行為は彼ら臣民らに有害に出来ないし、従って誰も彼の行為を正しくないとは批判してはならないということである。五つ目に、主権者が行う一切の行為は臣民によって処罰され得ないことである。すなわち主権者をもった人は、その臣民によって正当に処刑されたりまたは他の方式で処罰され得ない。六つ目に、主権者は臣民の平和と防衛に必要な事項と、臣民が習わなければならない理論がなんであるかを決定する判定観ということである。七つ目に、臣民の行為の規範を定めるあらゆる立法権は、主権者に属するということである。主権の設定以前には、万人は万物に対して対等な権利をもったので必然的に戦争を起こすようになるが、契約を通して確立された主権者が所有する規則の制定権は戦争を終息させ平和をもたらすのに必須である。八つ目に、あらゆる司法権と紛争解決権は主権者に属するということである。九つ目に、主権者は彼が最善であると考えてるところに従って、戦争と平和を構成する権利すなわち外交権と国軍統帥権を所有する。十番目に、主権者は戦争時と平時に諮問官と長官を選定する権利を所有する。十一番目に、主権者は賞罰権を所有する。十二番目に、主権者は国家に対して過去に奉仕をしたり現在奉仕をしている人の中で、飛び抜けた実績をおさめたり他の亀鑑になるにふさわしい価値を実現した人に対して授ける叙爵・叙勲の権利を所有する。

ホッブズは現在の生活において主権者の義務を次のように四つに区分した。(31) 最初に、外敵に対して臣民を防衛しなければならない義務である。すなわち公共の福祉という最高の法に含まれるのが国家防衛である。二つ目は、国内的に平和と秩序を維持しなければならない義務である。三つ目は、できるだけ公共の安全と一致するように人民の富を増大させる義務がある。すなわち富の増大を目的とする法律を制定することが主権者の義務である。四つ目は、臣民をして害のない自由を享受させる義務がある。

3. ホッブズ国家論の宗教的性格

平和状態を願うならば、人間は自らあらゆる権利を留保できなければならないとか、平和を仲裁するあらゆる人は安全な行動が許されるべきである、などのホッブズの自然法から生

まれた平和の概念を検証する時、彼は平和思想家に間違いない。ヘデリー・ブル(Hedley Bull)も、ホッブズこそは“真の平和の哲学者”(32)として認識されなければならないと言ったことがある。だが彼の思想は様々な解釈ができる部分をたくさん内包しているために、彼は個人主義者・自由主義者・合理主義者・機械主義者・経験主義者・快樂主義者・功利主義者・唯物論者・自然法論者・社会契約論者・唯名論者・法実証主義者・法現実主義者・絶対主権擁護・全体主義者・決断主義者・有神論者・無神論者などなど各種の名称で呼ばれもする。

(33) ラッセルも、ホッブズは分類するのが難しい哲学者(34)と表現したことがある。

このように多様な評価を受けているホッブズは、彼の政治哲学的著書である『リヴァイアサン』の第3部と第4部で博学な聖書的知識を土台に宗教問題(キリスト教)を扱っている。

(35) 平和の王の到来を記録した聖書的予言を基礎に、再臨メシアの降臨を論述することも行った彼は、『市民論』と『法学原理』で扱った宗教分野の内容も意外に多い。従ってホッブズの思想全体を理解するためには、彼の聖書観を基礎にしたキリスト教的宗教観を理解することが何よりも重要であるとみる。彼の哲学は聖書を基礎とするキリスト教思想を叙述する分量が少なくないためである。(36)

一般的にホッブズは無神論者(37)あるいは無神論的な性向をもった人(38)とみられているが、彼自らは第1原因としての神の存在と宗教現象を否定しなかった。(39) また前に考察してみたとおり、ホッブズは唯物論的基盤の上でその哲学的論理を展開した人であると一般的に認識するケースが多いが、ホッブズ自身は人間における宗教的生活の不可避性を理念的にあるいは事実として是認している。(40) のみならず、真の宗教と神国の法律は同一であるとしながら‘真の宗教’の像を形成しようと努力した。(41)

ホッブズが『リヴァイアサン』で宗教について本格的に詳細に議論した部分は前に少し言及したが、キリスト教国家と蒙昧な王国を扱った第3、4部である。彼の宗教観は中世スコラ主義に対する痛烈な批判だけでなく、宗教的教義それ自体だけでは決して人間の団結と社会的安定の手段になりえないことを指摘する。後述するが、宗教に対するホッブズの定義から分かるように、宗教が現実の政治的権力と合わせられた時にのみ、それが人々を一つに纏めてくれる役割をすることができるという。『リヴァイアサン』に表れたホッブズの宗教観を考察してみよう。

“一つ目に、人間の本性に特有なことは、彼らが目撃する事件の原因に関して、人によって差はあるが探求しようとするところである。あらゆる人は、彼ら自身の善悪に対する幸運と不運の原因を探求しようとする程度の好奇心はもっている。

二つ目に、あることが始まるのを見て、それは早くも遅くもない、まさにその時そのようなことが始まるように決定する原因をもっていると考えられることである。

三つ目に、獣は彼らの目につくことの順序と結果そして依存関係を観察したり記憶したりしていないために、将来に対する予見をほとんどまたは全くもつことができないので、彼らの日常的な餌や安易または欲望を楽しむことのほかには他の幸福がない。一方、人間はある事件が他の事件によってどのように発生したかを観察して、またそれらに対する前提と結果を記憶するのである。そして事物の真の原因を確認することができない時には、自身の想像が暗示するところに従ったり、または自分の側であると思い自身よりも賢明であると考えたりする他人等の権威を信頼してそれらの原因を仮定する。”(42)

ホッブズが考えた宗教は、祈禱と賛美、礼拝と信仰告白などの宗教的提議を通じた個人的救援にのみあるのではなく、宗教が神の政治(divine politics)であると言った。彼によると、神の王国では政治と国法(市民法)は宗教の一部分であり、そこには世俗的支配(temporal domination)と靈的支配(spiritual domination)の区別が存在する余地がない。真の宗教は国法に対する信仰である。従って異邦人の宗教であるとか啓示宗教であるとかを問わず、‘真の宗教’が実定化された当初の目的は、人々を政治社会により一層適合させるところにあると述べる。

前に、宗教が現実の政治的権力と合わせられた時にのみ人々を一つに纏めてくれる役割を果たし得るといったが、これと似た観点はヘーゲルからも発見されるという見解がある。“国家は宗教と表裏関係をもつ”(43)とか、“宗教は国家の基礎”(44)だとみたのがそれである。宗教は国家と不可分の関係にあることを端的に見せてくれるいくつかの内容である。明らかなことは、ホッブズがみた国家と宗教は一つであるということである。政治的権威と宗教的権威が一体化しているとみたためである。(45)そして政治的主権者は教会の首長(head)になる。従ってホッブズは、国家と教会を人格的に同一化して政治的主権者を最高の牧者(supreme pastor)と考え、ホッブズは人格の概念を基礎にして教会を次のように定義した。

“教会はその命令によって集合しなければならず、その権威なくしては集合してはならない、一つの主権者の人格として統一された、キリスト教信仰告白者たちの一団である”(46)

このようにホッブズは世俗的政府と靈的政府を一体化させようとした。すなわちホッブズは彼の主権理論を展開するにおいて教会を政治的権威に従属させた。このような観点からみる時、政治的主権者は最高の牧者(supreme pastor)として、他の牧者らを任命する権限をもつとしてホッブズは次のように述べる。

“各キリスト教の国家において政治的主権者が最高の牧者であり、その臣民たちという羊の群れ全体が彼の責任に委託され、その権威によって他の牧者がつくられて教える権力を持ち、他のすべての牧者としての職務を遂行するものとみれば、当然また次のことが出てくるようになる。

すなわち他のあらゆる牧者が、その職務に属する教授・説教・その他のいろいろな機能についての権力を引き出すことができるのは政治的主権者からということ、他の牧者らは彼の代行者に過ぎないということ。それはあたかもいろいろな都市の為政者、いろいろな法廷の裁判官、いろいろな軍隊の指揮者などが、あらゆる国家全体の為政者であり、あらゆる訴訟事件の裁判官であり、全軍の指揮官であり、常に政治的主権者である人の代行者に過ぎないことと同じである。”(47)

ホッブズは牧者らに対する最高の任命権が政治的主権者に限定されていて、他のあらゆる牧者の権限は、この最高の牧者としての政治的主権者に由来するということを強調する。のみならず政治的主権者は、最高の牧者として聖書に対する最終的解釈権をもつと述べる。

ヘーゲルも国家と教会が一体であることを語ったことがある。“教会と国家は真理と理性的本性との内容に関しては対立するのではなく、その形式を異にしているだけであることを認

識することが哲学的洞察” (48) であるとし、“国家と教会の一体性は最近になってもいろいろと論議され、最高の理想として立てられた目標” (49) であると陳述したむきもある。また “国家は宗教を基礎としなければならないと言うのであれば、この命題は、国家は理性的本性に土台を置かなければならず、この本性から生まれなければならないという意味” (50) であるとすることによって、彼は国家と宗教が一つであることを強調する。

4. 理想世界の到来と平和具現

ホッブズの再臨メシアについての見解に言及する前に、彼の大部分の思想が含まれている主要著書である『リヴァイアサン』の名前について調べてみよう。‘リヴァイアサン’は旧約聖書ヨブ記 41 章 1～26 節に描写されたとおり、国家あるいは統治者を象徴する言葉として、無敵の力をもった海の動物の名前である。“見よ、その望みはむなしくなり、これを見てすら倒れる……地の上にはこれと並ぶものなく、これは恐れのない者に造られた。これはすべての高き者をさげすみ、すべての誇り高ぶる者の王である。” (51) 前に考察したとおり、ここでリヴァイアサンは絶対的であり、恐るべき力をもった怪物として描写される。

このような意味は 1651 年に発行された初版中表紙に載った絵 (52) (本論文の一番終わりの絵) を注意深くみることによって、リヴァイアサンを通して国家を象徴的に表現しようとしたホッブズの含蓄のこもった意味を理解することができる。中表紙の絵の上半部には、無数に多くの小さな形体で構成された人物が、平和な田舎の村の上に刀と司教杖を両手に持ったまま巨大な大きさに拡大されている。この人物をタック (R. Tuck) は薄気味悪い姿 (53) と表現している。この人物に対するタック (R. Tuck) の描写について筆者は同意しないが、ある人が説明するには、この人物が右手に持っている刀は国家の力を象徴し、左手に持っている司教杖は宗教的権威を象徴する (54) とした。

ここで王冠を被ったこの方がまさにリヴァイアサン、すなわち必死の神 (mortal god) であると説明した彼は、‘ホッブズが心に思った統治者は、世俗的な国家と教会を掌握している絶対権力の所有者’であると表現する。このような見解は大部分の学者が主張する一般的な観点である。従って自己保存と平和の追求という実践的命題を哲学の二本の軸に定めたという見解 (55) からみる時、彼は明らかに平和の哲学者であることに間違いない。

前に言及したとおりヘデリー・ブルが、ホッブズこそは‘真の平和の哲学者’と認識されなければならないとした主張は、しかして妥当であるとみる。だが筆者は聖書に既に予言されたとおり、ホッブズが表現したこの人物は、平和世界を実現するために到来するようになる平和の王 (peace king) としての再臨メシアの姿を象徴的に描写したものとみようと思う。

平和の王という言葉については後述するが、聖書によれば、再臨 (56) という言葉は、救世主であるイエス様が再び来るという意味で、聖書を經典として頂いているあらゆるキリスト教徒が所望しているうちの 하나가、本人の生前に再臨するイエス・キリストを迎えるところにある。(57) 初臨のイエス様は人類を完全に救援するために降臨したが、選ばれたユダヤ民族とユダヤ教が不信することによって十字架で亡くなったために、救援摂理が完成しなかった。(58) そうして再び来るという再臨の約束をした後、イエス様は昇天し、葬事を行った後 3 日ぶりに霊的に復活したという信仰を根拠に立てられた宗教がキリスト教である。

メシア (Messiah) という言葉はヘブライ語のマシアフ (mashiach) すなわち ‘油を注がれた

者’に由来した言葉で、救世主を意味する言葉である。(59)ところが『原理講論』によれば再臨メシアという言葉は、イエス様がこの地に救世主であるメシアとして再降臨した後、人間を肉的救援だけでなく霊的救援まで完成して、平和の世界を実現してくれる方として救世主、すなわち人間を罪悪の世の中から完全に救援する方をいう。すなわち彼は神様の救援摂理を完成するため、聖書に予言されたとおりに再び来なくてはならない方である。(60)

筆者は本論文の最後に掲載した、ホップズの著書の中表紙に載った人物について熟考しようと思う。この人物についてホップズ自身が直接的に説明したことはないが、色々な状況を考察してみる時、再臨メシアを形象化したものとみるからである。

まず絵の内容を簡単に要約しようと思う。絵の半分から下には、左側と右側に各々5個のパネルに絵が描かれている。左側の一番下の絵は、戦争跡地の様子として‘万人に対する万人の闘争状態’である自然状態を表現している。その上の絵は、戦いを終えた後下ろした武器を描いた絵であり、三番目の絵は、砲声が止まった大砲の絵であり、四番目の絵は王冠であり、五番目は堅固な要塞の絵である。このように左側に描かれた5個の絵の意味が象徴するものは、統治権の絶対的確立と安定した国家の成立という論理によって解釈できる。

反対側である右側の一番下の間は、雰囲気 が荘重な司教会議や宗教裁判を連想させる。2番目の間は、二紙窓3つと三紙窓1つが集まった絵である。対立と葛藤の現実世界を象徴的に表現したとみられる。三番目の間は、稲光がして雨が今にも降りそうな感じを与える。これは分裂して戦う教会と聖職者らに対する神様の憤怒を表しているようである。4番目は司教の帽子であり、五番目の教会は宗教的権威と力の確立を象徴している。左右5個のパネルの間には本の題目と著者の名前が書かれていて、表紙の一番上にはラテン語で“地上にはもうこれ以上に力の強い者がいないから、誰が彼と競おうか! -ヨブ記 41章 24節”という言葉が記録されている。

これから絵の上半分の村風景について注意して見てみよう。村には尖った塔をもった雄壮な教会をはじめとして、秩序整然と配置されたいろいろな建物、豊穰な野原と美しい山々が描かれている。野原を過ぎて間もない所に高い山があつて、春なら陽炎が立ち昇る野原でカンコウ鳥の鳴き声を聞きながら友人らと駆け遊んだ思い出にさせる。夏なら溪谷に沿って流れる涼しい水の中に足を漬しながらザリガニを捕まえて遊んだ思い出、秋なら木の葉ごとに色々に紅葉して自然の神秘を感じさせる山中の狭い小道を歩いた思い出、冬なら傘下が白色の雪に覆われて純白の美しい世界を感じさせ、冷たい向かい風の中でも登山する楽しみや、いろいろな猟具を利用して狩猟する楽しみも想像できる。山を越えて風景の左側角には穏やかな海が描かれているので、バタ足を打って泳いだ海辺での幼い時の追憶も連想される絵である。

このように絵の上半分に表現された村の絵は、平和で安定した田園風景が、温みと平温さ、こぢんまりとした様と豊饒さなどを感じさせる。そしてここは、人間ならば誰でもみなその心の中に大事に保管しているであろう故郷の地として、幼い時の追憶が遥かに思い浮び上がるような平和の理想郷を表現したと分析される。ところが‘万人に対する万人の闘争状態’である現実世界に生きてみると、人間は複雑な人間関係や絡まりあつた利害関係ゆえに、あるいは絶望せざるをえない残酷な事態に直面した時、生を放棄する極限状況に到達するようになる場合もある。克服し難い切迫した状況に処した人間には、どんな思いがするの? 水に溺れた者は藁をも掴む、という言葉があるように、難しい状況に処した者はその問題を解

決してくれる能力をもった何らかの存在を考えるはずで、自身の苦痛なその問題を解決してくれることを切実に期待するはずである。私たちが幼かった時にこういう難しい問題を解決してくれるのは自身の父母である。

従って対立と葛藤そして制度圏から疎外された立場で、難しく苦痛な極限状況に処するようになると自身の父母が思い出されるのはおそらく人之常情であろう。そして父母が思い出される時、人間はその父母が生きている故郷を思い浮かべるようになる。このように寂しく辛い時そして悔しくて悲しい時、いつでも行ってみたいと訪ねて休みたいとまた行って抱かれたい平和で安楽な理想郷を懐かしむのが人間本性の中の一つであるならば、この絵は平和の理想郷としての故郷を懐かしむ人間の心理を率直に表現したものとみられる。

ではこの絵をもう一度注意深くみてみよう。王冠を被った方が右手には国家の力を象徴する刀を、左手には宗教的権威を象徴する司教杖を持ち、平和な人間世界を見下ろしている。この方が誰であるか?人間の理想郷といえる平和な村を見下ろしているこの方は、ホップズが聖書に予言された内容をそのまま表現した“再び来る主”(61)すなわち再臨するメシアを形象化したものとみななければならぬか?従って平和な村の上にいらっしゃる再臨主を形象化したこの絵は、明らかに平和の王としてこの村の中心となるものを表現したのである、とみようと思う。

聖書によれば、イエス様は平和の王(62)として降臨したが、靈的にのみその御旨を成就したのであり肉的にはすべてを成し遂げられなかったために、再臨するメシアは初臨のイエス様が成就しようとした平和の王として再び来ると表現したのである。

“その方が再び来れば、その選民たちの上に彼の栄光の権勢が永遠に持続するその日が再び始まる(And after his coming again shall begin that his glorious reign over his elect which is to last eternally.)はずである。”(63)!

上の文章のうち“その方が再び来れば”という言葉にもう一度注意してみよう。聖書にはメシアが再び来るといふ再臨の記録がいろいろな箇所にある。ホップズは彼の著作の中で宗教論が全体の過半を占める(64)程、聖書的知識に博学な立場に立っていたので‘その方が再び来る’という事実を既に知っており、そのためにそういう見解を彼の著書の中で表現したとみななければならぬであろう。であるならばホップズが言う‘再び来るその方’とは‘誰’か?そしてその方は何をしようと‘再び来る’というのか?

実際にホップズは神様の国(Kingdom of God)という言葉が『リヴァイアサン』のいろいろな所で使用している。(65)聖書によれば‘再び来るその方’は王権をもってこの地に来て(66)神様の国を建てると予言されている。それでホップズも“その方が再び来れば彼の栄光の権勢が永遠に持続するその日がもう一度始まるだろう”と述べた。実際メシアが再降臨する時、旧約聖書イザヤ書9章などいろいろな箇所での表現のとおり、全能であらせられる神様として、永存なさる父として、安定平和の王として降臨すると記録されている。従ってこの絵の主人公は、前の絵の下半部の左側の絵が象徴する国家と、右側が象徴する教会を一つにする二つの力をもって降臨し、‘万人に対する万人の闘争状態’である罪悪の世界を清算して、万人が願う平和の世界を建設するはずである、との内容を強力に暗示したものとみることが出来る。すなわちホップズはこのような2種の力をもって再臨する‘メシア’を『リヴァイア

サン』の中表紙の顔として描写したのである。

ホップズは現実の政治世界の反目と対立、闘争と葛藤が溢れる当時の英国社会を生きながら、‘万人に対する万人の闘争状態’である現実世界の中ではそういう平和の世界が実現されないことをよく知っていた。従って彼は聖書が予言している再臨メシアの降臨(67)を考えるようになり、ただ彼を通じてのみついに成されるはずだとの、聖書的観点を基礎にして彼は再臨メシアの降臨に言及したのである。従って再臨メシアは聖書の予言どおり平和の王(Prince of Peace)として降臨し、彼が打ち建てる国は平和の王国(Kingdom of Peace)であるとの事実を勘案した表現であるとみる。のみならずホップズはそのような聖書的観点から政治の現実を眺めることによって、強力な権限をもった再臨メシアの顕現を期待したとみられる。

人類歴史を注意深くみると、東西古今を問わず個別の人間はもちろん、いろいろな宗教人もよりすぐれた未来を憧憬しながら生きてきた。彼らの宗教的思想を調べてみる時、自分なりの理想郷と言いうる平和理想世界の到来についての見解が、宗教ごとにはほぼ設定されているのをみてとることができるからである。天国、楽園、極楽、涅槃、成仏、救援、神仙合道、天人合一、仙境、武陵桃源のような概念は、みな彼らが願っている平和世界に対する表現である。現実が苦痛で辛い時、このような平和理想郷に対する憧憬はより一層切実であった。特に既成宗教のメシアニズム的傾向を考察してみればはっきりと知ることができる。(68)

今まで平和世界の到来に言及した宗教や、その世界の実現可能性についての見解は多かったが、未だに現実世界は宗教間の戦争、民族間の戦争が去らずにある。また1945年に創設された国際連合(United Nation)はその憲章で宣言したとおり、国際平和と安全維持という国際社会の絶体絶命の課題を解決するための包括的手段として出発したが、宗教間・民族間・階層間の対立と葛藤の現実問題を解決出来ずにある。ホップズ思想を今日の現実に照らしてみる時、“世界平和超宗教国家連合”を創設して平和運動を展開している文鮮明先生思想と活動に大きく向き合っているものとみられる。彼は現実世界で起こっている葛藤と分裂の原因が多様な宗教を基礎とする価値観と思想の差異に起因しているとみて、一つの宗教と思想を定立するところに心血を傾けると同時に、これを現実的に実践するための多様な活動を展開してきた。

すなわち文先生は‘一つの神様の下の一つの世界’という旗印の下、1954年“世界基督教統一神霊協会”を設立して以降、去る50余年間に行なわれた説教の御言葉と祈禱に表わされた思想的体系が統一運動の基礎となり、分裂した世界を統一して平和世界を実現するために初志一貫の人生を送ってきた。自ら“本人は早くから天の召命を受けて神様の御旨を地上に実現させるために生涯を捧げてきた。…民族の受難の意味を独自に解析しながら、分断韓国を統一祖国に転換させることが、まさに平和世界の実現と直結しているのを確信している”(69)ことを明らかにし、“本人は…真の人類の平和のために血と汗と涙を流してきた”(70)と告白もした。

のみならず“平和はただやって来るものではない。自己中心的な‘私の為にせよ’という思想を全滅させ撃破しなければ来ないもの”(71)と言及しながら、“平和は神様の真の愛と真理をすべての人類が、個人から始めて家庭に、家庭から社会・国家・世界と一緒に共有して実践することによって、人類が兄弟姉妹であることを悟って地球大家族社会を成し遂げる時にのみ実現される”(72)ことを明らかにした。

終わりに

ホッブズは『リヴァイアサン』の出版を通じて多勢の人から非難と呪いを受けなければならなかった。(73) 人間の自己保存原理に基づいた彼の国家論は、神聖君主論を主張した数々の絶対主義者や、市民権に立脚した共和制首唱者らにいずれもみな受け入れられなかったし、主権者の意思による聖書解釈及び教会の従属を要求する彼の教会観は、カトリック・英国国教会・清教徒すべてに容認されえなかったのである。のみならず機械論的唯物論に基づいた彼の宇宙観や、彼の人間本性についての考察などは、17世紀の英国人の目には到底理解し難い問題であったも知れない。

周知のように現代は‘利益社会’‘競争的市場社会’‘利己主義’がその頂点に向けて駆け上がっている時代である。このような社会の中の人間たちに‘人間の尊厳性’と‘人間らしい生’を具現してあげ保障してあげるための秩序と正義が実現された状態が、今日の私たちが考えている‘国家’であるならば、ホッブズの国家思想はたとえ17世紀の思想であるとはいえ、私たちに示唆してくれるものが大きい。なぜならば彼の思想の核心を成している‘自然状態理論’・‘自然法論’・‘国家設立契約論’といわゆる‘絶対権力論’はまさに‘現実社会’が、そして現代の‘国家’がどういうものでなければならぬかを克明によく見せているからである。従ってホッブズの思想は、無秩序なようであり混乱の側面が多く見られる‘現代’の国家の姿を、どうしなければならぬかを考えさせる珍しい思想である。従って前でも言及したのであるが、ヘデリー・ブルはホッブズこそは“真の平和の哲学者”として認識されなければならないと主張したが、これは強力な統治権を通じた平和の具現こそは人間ならば誰もがみな望む国家であるというだけでなく、ホッブズが願うところであると感じたためであろう。

結局ホッブズの思想は、英国内乱の無政府的混乱状態を克服して平和と秩序を確保するための安全国家理論を提示した、という点から高く評価されるとみることができる。特にリヴァイアサンの初版の中表紙が象徴的に見せてくれるように、彼の宗教的信念はメシアの再臨とともに混乱した社会を清算して、平和と理想が溢れる願われた世界、すなわちメシアによって建てられる平和な神の王国(God's Kingdom of Peace)を描きながら、強力な権限をもちつつ父の栄光をもって来られる方であるから、愛を中心とした強力な権威ある世界を望んだとみる。

[リヴァイアサンの初版中表紙の絵]

☆参考文献☆

Thomas Hobbes、Leviathan、Vol 23、of Great Books of The Western World、Chicago: Encyclopedia、1952.

Bull、Hedley.

"Hobbes and the International Anarchy、" Social Research、Vol.

48、Winter、1981.

Mintz、S、I.

The Hunting of Leviathan: Seventeenth Century Reactions to the Materialism

and Moral Philosophy of Thomas Hobbes, Cambridge University Press, 1969.

カン・ジョンイン編訳、リチャード・タック他、ホッブズの理解、ソウル：文学と知性社、1993。

ク・ギソク、ホッブズの政治思想研究、湖南政治学会会報、1993。

キム・ビョンゴン、古典散策・リヴァイアサンとトーマス・ホッブズの政治思想、社会批評 8号、1992。

キム・ヨンファン、ホッブズの社会・政治哲学-リヴァイアサンを読む-、ソウル：哲学と現実社、1999。

キム・ヨンファン、ホッブズの力の政治哲学：暴力と統制、東西哲学研究第 29号。

キム・ホンチョル、韓国新宗教の研究、ソウル：チムムンダン、1989。

ナ・チョンイル、チョン・ビョンヒ訳、アリストテレス、政治学、ソウル：三星出版社、1994。

マルチア・エリアデ、世界宗教思想史 2、ソウル：(株)理学社、2005。

文鮮明先生御言葉編纂委員会、文鮮明先生御言葉選集(第 193、197、198、259 卷)ソウル：成和出版社。

鮮文大学、現代文化と統一思想、忠南牙山、鮮文大出版部、2005。

聖書、大韓聖書公会、ソウル：大韓聖書公会、1987。

聖書、共同翻訳(カトリック用)、大韓聖書公会、ソウル：大韓聖書公会、1977。

ユン・ヨンタク訳、ヘーゲル：法哲学、世界の大思想 7、ソウル：徽文出版社、1972。

ユ・ジョンガプ、トーマス・ホッブズの国家論と平和思想、中央大学博士論文、2003。

イ・ドンファ、水運心法講義、天道教中央総部、1968。

イ・ファング、ホッブズと政治思想、ソウル：大王社、1984。

原理講論、世界基督教教統一神霊協会、ソウル：成和社、1987。

ジョン・ヒネルス、世界宗教辞典、ソウル：カチ房、1996。

チャ・ジョンフン、トーマス・ホッブズの思想からみた絶対的国家権力と国民の自由、法哲学研究第 2 卷、韓国法哲学会、1999。

チェ・ビョンファン、ヘーゲル哲学における国家と宗教の相補性に関する研究、東国大学大学院博士学位論文、1989。

統一思想要綱、統一思想研究院、ソウル：成和出版社、1994。

ホッブズ、君主論/リヴァイアサン、ハン・スンジョ訳、ソウル：三星出版社、1994。

(1) トーマス・ホッブズ(Thomas Hobbes、1588~1679)は英国の哲学者として西欧の中世時代に近世の門を開けた先覚者の中の一人。

(2) キム・ビョンゴン、古典散策・リヴァイアサンとトーマス・ホッブズの政治思想、社会批評第 8号、1992、p. 256 参照。

(3) 李奂九、『ホッブズと革命思想』(ソウル：大王社、1984)、pp. 152-153。

(4) 李奂九、『ホッブズと革命思想』(ソウル：大王社、1984)、p. 26。

(5) ク・ギソク、ホッブズの政治思想研究、湖南政治学会会報、1993、p. 5。

(6) Thomas Hobbes、Leviathan、chap. 3、Vol 23、of Great Books of the Western World(Chicago: Encyclopedia、1952)、p. 53 参照。(以下 Leviathan と表記)

(7) Leviathan、Introduction、p. 47 参照。

(8) Leviathan, chap. 6, p. 61。

(9) Leviathan, chap. 13, p. 85。

(10) Leviathan, chap. 13, p. 84。

(11) Leviathan, chap. 15, p. 94。

(12) “De Cive” 1 章と “The Elements of Law” の 1 部 14 章でも自然状態について叙述的定義をする代わりに状況説明をするのに留まっている。

(13) キム・ヨンファン、ホッブズの力の政治哲学:暴力と統制、p. 122～123 参照。

(14) 『原理講論』、世界基督教統一神霊協会（ソウル：成和社、1987）、pp. 94-95。『原理講論』は世界平和家庭連合(俗称統一教)の教理書として、1957 年 8 月に出た『原理解説』を補完し 1966 年 5 月 1 日に新しく刊行された。本書は比喩と象徴で書かれた聖書 66 巻を、一般キリスト教徒等の解釈とは異なり新しい角度から再解釈したものとして、文鮮明先生の指導により当時いろいろな弟子たちが努力して脱稿したものである。

(15) 『原理講論』を論理的に解析した統一思想によれば、人間始祖のアダム・イブを造られた神様は心情(愛を通して喜びを得ようとする情的衝動)の神様として、神様と人間の本来の関係は愛を中心とする父母と子息と同じ心情一体の関係であり、一つの神様を中心とする一つの世界を成そうとしたが、人間が墮落することによってサタンが中心となった罪悪世界になった。神様と人間の間には回復すべき情的因縁があり、人間の墮落行為を見て知っているながらも干渉出来なかった神様の悲しい縁があるという部分などが補完されなければならないとみる。統一思想研究院、『統一思想要綱』(ソウル：成和出版社、1994)、p. 58～60 参照。そして詳細な説明は世界基督教統一神霊協会、『原理講論』(ソウル：成和社、1987)、p. 106～108 参照。

(16) ホッブズの人間理解は聖書とギリシャ思想の伝統に基づいている。ギリシャ人たちは人間を理性をもった存在として自然と区別した。近世哲学でも人間は理性的存在として把握し、理性を尊重する傾向は啓蒙主義に連結する。近世の合理主義と経験主義を総合して啓蒙主義を完成した人はカントである。カントによれば知識は経験から出発するが、私たちの理性は感覚が外部世界から受け入れた材料を整理するにおいて理性が経験に依存することがなく、生来的な法則と形式従う。従って理性の判断は先験的で普遍的である。理性を最高位の段階に押し上げた人がドイツ観念論の完成者ヘーゲルである。その他に人間において意志を強調した部類、感性を強調した部類、存在が意識を決定するという部類、人間本性のあらゆる部分が悪い性向に汚染されたというキリスト教的主張などがある。人間理解という観点について統一思想では、本性論で本来の人間の姿すなわち墮落しない本性的人間を説明する。鮮文大学、『現代文化と統一思想』(忠南牙山：鮮文大出版部、2005)、pp. 133-151 参照、人間の本来の姿を説明する本性論についての詳細な内容は統一思想研究院、『統一思想要綱』(ソウル；成和出版社、1994)、pp. 227～287 参照。

(17) ホッブズは『法の基礎』で契約を 3 つの種類に区分している。最初は契約の二人の当事者が現在の契約内容を履行する場合で、二つ目は一人の当事者が即刻履行し他方は約束する場合で、三つ目は二人の当事者がいずれも現在は履行しないが互いに信頼する場合である。

The Elements of Law、1章15節8-9項、pp. 77-78。

(18) Leviathan、chap. 17、p. 99 参照。

(19) Leviathan、chap. 17、p. 99。

(20) Leviathan、chap. 17、pp. 100~101。

(21) Leviathan、chap. 17、p. 100 参照。

(22) Leviathan、chap. 17、p. 100。

(23) Leviathan、chap. 17、p. 100。mortal god をハン・スンジョは必滅の神と翻訳し(リヴァイアサン、ハン・スンジョ訳、p. 263) 金龍環は必死の神(ホッブズの社会政治哲学、金龍環著、p. 222) と翻訳したが、筆者は金龍環の表現に従おうと思う。

(24) 『共同翻訳聖書』(ソウル: 大韓聖書公会、1982)、旧約聖書ヨブ記、41章12~34節。

(25) Leviathan、chap. 19、p. 105。ホッブズは政治組織如何によって国家組織が決定されるものとみて、国体(form of state)と政体(form of government)を区別しなかった。

(26) アリストテレスは彼の『政治学』1279 a 22 以下で、三つの善なる政体と三つの変形したあるいは墮落した形態を含んだ6つの政体を提示している。三つの善なる政体とは1人支配制あるいは君主制、少数支配制あるいは貴族制、多数人支配制あるいは法則的民主制などがあって、残りは変形した形態等である。暴君政治は君主制が墮落した形態で、寡頭制は貴族制が墮落した形態であり、愚衆制は混合政治の墮落した形態であると述べる。アリストテレス、『政治学』、ナ・ジョンイル、チョン・ビョンヒ訳(ソウル: 三星出版社、1994)、p. 129-130 参照。

(27) Leviathan、chap. 19、p. 105 参照。

(28) Leviathan、chap. 19、p. 105~106 参照。

(29) Leviathan、chap. 41、p. 204 参照。

(30) Leviathan、chap. 18、p. 101~103 参照。

(31) Ibid.、pp. 214~226 参照。

(32) Hedley Bull、"Hobbes and the International Anarchy、" Social Research、Vol. 48(Winter pp. 725~738 参照。

(33) チャ・ジョンフン、トーマス・ホッブズの思想からみた絶対的国家権力と国民の自由、法哲学研究・第2巻・韓国法哲学会、1999、p. 81。

(34) Bertrand Russel、A History of Western Philosophy、チェ・ムノ訳(ソウル: チムムンダン、1975)、p. 692。

(35) 『リヴァイアサン』の第3部・キリスト教国家と、第4部・蒙昧な王国で扱った宗教論は全体分量の過半を占める。ホッブズは人間の本性を原罪視する従来の伝統神学に対する批判を通して人間それ自体の倫理的自己完結を試み、伝統的原罪観念を清算して真の宗教(true religion)像を提示しようとした。イ・ファング、『ホッブズと革命思想』p. 157 参照。

(36) 『リヴァイアサン』第3部と第4部に宗教問題が取扱われているが、量的に見れば宗教論が全体の分量の過半を占めており、それ以外に『市民論』『法学原理』などホッブズの著作の中で直接宗教に配当された部分は意外に多いと述べる。リ・ファング、『ホッブズと革命思想』(ソウル: 大王社、1984)、p. 157 参照。

(37) ホッブズがデリー司教(主教、Bishop of Derry)であるブラムホール(Bramhall)と繰り

広げた論争を調べてみると、ブラムホールがホッブズを無神論であると告発するや、ホッブズは自身の神観を哲学的に提示した。その論争内容を綿密に考察してみると、ブラムホールとホッブズの根本的な争点は神の形体に関することであった。ブラムホールは神を‘無形の精霊’ (spirit incorporeal) とみたのに対し、ホッブズは‘有形の精霊’ (spirit corporeal) とみたのである。この論争でホッブズは、神を無形の精霊と見做すブラムホールの神観は結果的に無神論となりうると反駁し、神は実在する‘きわめて純粹・単一・不可視な有形の精霊’ (a most pure, simple, invisible spirit corporeal) と主張した。Hobbes, “An Answer to Bramhall,” in Works, Vol. 4, pp. 284-383 参照。

統一思想の原相論によれば、二人の見解は神の属性を扱う分野である原相において神相の一部門ずつだけを主張したものと把握される。神の性相には内的性相(機能的部分)と内的形状(格好の要素)があるが、ブラムホールの‘無形の精霊’ (spirit incorporeal) は内的性相に、ホッブズの‘有形の精霊’ (spirit corporeal) は内的形状に該当するとみる。『統一思想要綱』(ソウル: <株>成和出版社、1994)、pp. 30-32 参照。

(38) Leo Strauss, *Natural right and History* (Chicago: University of Chicago Press, 1952)、p. 199。シュトラウスは、ホッブズが自身の論理的安全を確保するために、彼の真の無神論を有神論で偽装したと主張する。

(39) S. I. Mintz, *The Hunting of Leviathan* (Cambridge: At the University Press, 1970) pp. 39-44。ミンチュは、ホッブズが非正統的有神論者ではありえるが、厳密な意味において無神論者ではないと言う。

(40) Hobbes, *De Cive* (*Philosophical Rudiments Concerning Government and Society*)、Chap. 14、in Works, Vol. 2, p. 198。無神論は第1原因の存在を推論出来ない‘無分別の罪’ (sin of imprudence) であるとホッブズは非難している。

(41) *Leviathan*, Chap. 12. pp. 80-83。

(42) *Leviathan*, chap. 12, p. 79。

(43) 崔秉煥、ヘーゲル哲学における国家と宗教の相補性に関する研究: 法哲学を中心に、東国大学博士学位論文、1989、p. 97。

(44) 崔秉煥、上記論文、p. 135。

(45) 李奂九、前掲書(ソウル: 大王社、1984)、p. 172 参照。

(46) *Leviathan*, chap. 39, p. 198。

(47) *Leviathan*, chap. 42, p. 225 参照。

(48) 『世界の大思想 7』、ヘーゲル: 法哲学、ユン・ヨンタク訳(ソウル: 徽文出版社、1972)、p. 445。

(49) 前掲書、p. 448。

(50) 前掲書、p. 450。

(51) 『共同翻訳聖書(カトリック用)』(ソウル: 大韓聖書公会、1977)、旧約聖書ヨブ記 41:1 ~26、pp. 833-834。

(52) 表紙の図案は友人であり画家であるウェンゼラス・ホラー(Wenceslaus Hollar)の作品だというが、作家未詳という説もある。リチャード・タック他、『ホッブズの理解』、姜正仁編訳、(ソウル: 文学と知性社)、1993、p. 48。

(53) リチャード・タック他、『ホッブズの理解』、姜正仁編訳、(ソウル: 文学と知性社)、

1993、p. 48。

(54) 詳細な説明は金龍環、『ホッブズの社会・政治哲学-リヴァイアサンを読む-』、哲学と現実社、1999、p. 222~226 参照。表紙の人物がチャールズ1世なのか、でなければクロムウェルかについての論議が起きたが、ホッブズが『リヴァイアサン』出版に先立ち筆写本を革で装丁して未来の王チャールズ2世に贈呈した時の人物はクロムウェルでないことが確実である。Arnold A. Rogow、Thomas Hobbes -Radical in the service of Reaction、W.W. Norton Co. 1986. p. 154。

(55) ユ・ジョンガブ、トーマス・ホッブズの国家論と平和思想、中央大学博士学位論文、2003、p. 147 参照。

(56) 再臨されるという聖書の根拠はいろいろな場所にある。マタイ 16:27、マタイ 24:36、アモス 3:7、ヨハネの黙示録 3:3、テサロニケ前書 5:4、ルカ 21:34-36 など。

(57) 『聖書』、マタイによる福音書 10:23[よく言うておく。あなたがたがイスラエルの町々を回り終わらないうちに、人の子(人子：再臨のイエス様の名前-筆者註)は来るであろう]、マタイによる福音書 16:28[よく聞いておくがよい、人の子が御国の力をもって来るのを見るまでは、死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる]。

(58) 『原理講論』、世界基督教統一神霊協会(ソウル：成和社、1987) p. 148-153 参照。この論理は一般キリスト教思想からみる時全く異なる見解であるために、多くの論議が引き起こされうる。ここではこの問題が本論文が展開しようとする論理の方向と別であるのでこの程度に留めようと思う。

(59) ジョン・ヒネルス、『世界宗教辞典』、(ソウル：カチ書房、1996)、p. 89。

(60) 『原理講論』、前掲書、p. 153-155 参照。

(61) ホッブズは Leviathan、chap. 41、p. 204 で“その方が再び来れば、その選民たちの上に彼の栄光の権勢が永遠に持続するその日が再び始まる”のであると説明したことがある。これと関連した文先生の観点の詳細な説明は『原理講論』pp. 477-509 参照。

(62) 『聖書』、イザヤ 9:6 [とこしえの父(Everlasting Father)、平和の君(Prince of Peace：平和の王-筆者註)となえられる。そのまつりごと(政事)と平和(平康)とは、増し加わって限りなく…]、

ルカによる福音書 19:38 [主の御名によってきたる王に、祝福あれ。天には平和、いと高きところには栄光あれ]。

(63) Leviathan、chap. 41、p. 204。

(64) イ・ファング、『ホッブズと革命思想』、p. 157。

(65) ホッブズは実際に Leviathan、chap. 12、p. 83、chap. 31、p. 159、chap. 35、p. 177、等多くの箇所で神様の国という言葉を使用している。

(66) 『聖書』、マタイによる福音書 10:23、16:27、24:36、ヨハネによる福音書 21:18~22、ローマ書 11:11、ヨハネの黙示録 7:2~3、ダニエル書 7:13、イザヤ、9、11、60 章等。

(67) 前に引用したことがあるが(Leviathan、chap. 41、p. 204)には“その方が再び来れば、その選民たちの上に彼の栄光の権勢が永遠に持続するその日が再び始まる(And after his coming again shall begin that his glorious reign over his elect which is to last eternally.)のである。”表現している。

(68) 近づく未来の平和理想世界に対する描写は宗教ごとに表現が異なるか、その世界を希

求する目標は同じである。ユダヤ教は“イセ(Jesse)の幹に芽生えた芽”(メシア-編集者註)について言うのに、“こちらに来て子供と一緒に暮らし、ヒョウは子ヤギと共に伏し、子牛と若獅子は共に食し、小さい童がそれらの面倒を見る”樂園を公正に治める者と表現する。『聖書』イザヤ 11:6 以下。Mircea Eliade、『世界宗教思想史 2』(ソウル: 理学社、2005、pp. 349-350 参照。

仏教では、将来彌勒仏により平和世界が実現されるのを描写する。“その時は彌勒菩薩(Maitreya)が兜率天から人間界に降りて生まれた後…龍華^{ダン}の下で仏道を成就しよう。”『阿含經』44 卷、“…世界中がただ平和で怨讐や泥棒の心配がなく、…災難と戦争、貧困がなく…互いに慈悲の心で尊敬するので、これはみな彌勒仏が慈悲の心で悟らせ導いて下さるから”という。『彌勒成仏經』。このような彌勒菩薩に対する信仰は、統一新羅期と高麗初期に登場した花郎徒精神や、弓裔、甄萱、妙清などの改革思想や高麗末の辛旽が主張した“耕者有田”制度、旧韓国末に登場した天道教や増産教などの新興宗教運動も彌勒信仰の実践的表現であるとみることができる。

水雲思想の理想郷についての模様を李敦化は次のように説明する。最初に、地上天国では誰もが長生不死する。ここでの長生不死は肉身の長生や靈魂の不滅を意味するのではない。人間の生活が社会的に有機長生すること、すなわち社会という大我が不生不滅であることを意味する。二つ目に、地上天国の生活は徳治生活を土台とするものである。階級の対立や貴賤の差別などが無く、人間は相扶相助の徳性で生きていく。三つ目に、儀式主義の不自由と疾病、災難のような自然的圧迫を克服した状態での生を意味する。李敦化、『水雲心法講義』、天道教中央総部、1968、p. 106。

甌山は、近づく平和理想世界について『大巡典經』で次のように地上仙境として表現する。“…後天では天下が一つの家族になり、…民は悔しさと恨みと相克と荒っぽさと貪心と淫蕩と怒りとあらゆる煩惱がなくなる。…貧富の差別が撤廃され、雲車に乗って空中を飛び、遠く険しいところを行き来しながら、…これからやって来る良い世の中では、火を焚かずにご飯を炊いて食べ、手に土を付けずに耕作を行い、どんなに薄田でも沃土となる。”『大巡典經』5-16~18。

少太山は、やはり未来は平和理想世界として、美しい樂園であることを『大宗經』、展望品で次のように説明する。近づく樂園世界の姿は天堂であり、極楽であり、仙境であり、龍華会上の姿である。彼はこの世界を“廣大無量な樂園”と表現した。“…帰ってくる会上は龍華会上、人智ははるかに明るくなり、皆が生き仏となって家々ごとに仏が住む。他人に与えられず、負けられず、為にしてあげることができずに口惜しさを抱き、罪を犯すことが嫌で、…山には泥棒がおらず、道では流れ物を拾わない真の文明の世界となる。悪い偽りの人の生活はますます困窮になり、正しく真なる人の生活は自然と豊かになる。面面村村に学校があり、あらゆる財産は子女に相続せず、教化、教育、慈善事業に使い、人々が他人に利益を与えることで自らの利益とする世の中になる。”『大宗經』、展望品 16-28。キム・ホン Chol、韓国新宗教思想の研究(ソウル: チムムンダン、1989)、pp. 153-156。再引用。

(69) 文鮮明先生御言葉編纂委員会、『文鮮明先生御言葉選集・第 193 卷』(ソウル:<株>成和出版社)、p. 317。以下『御言葉選集』と表記する。

(70) 『御言葉選集』198 卷、p. 162。

(71) 『御言葉選集』197 卷、p. 272。

(72) 『御言葉選集』 259 卷、p. 47。

(73) 実際 1683 年オックスフォード大学校庭で 250 名の学者が賛美歌を歌う間に放火に遭ったこともあり、ある教授はホッブズ主義者という名前でケンブリッジ大学の教授職から追われることもあった。